

実践報告

発達障害のある人の育ちのステージに応じた支援とは －「西九州大学・短期大学部 発達障害支援勉強会」報告（2）－

日野久美子¹⁾, 川邊浩史²⁾, 諸石菜々子³⁾, 福元裕二⁴⁾

(西九州大学子ども学部子ども学科¹⁾, 西九州大学短期大学部²⁾,
西九州大学ダイバーシティセンター³⁾, 西九州大学・西九州大学短期大学部⁴⁾)

(令和7年2月5日受理)

Support According to the Developmental Stages of People with Developmental Disorders. － Nishikyushu University/Junior College Study Group on Support for Developmental Disorders (2)－

Kumiko HINO¹⁾, Hirofumi KAWABE²⁾, Nanako MOROISHI³⁾, Yuji FUKUMOTO⁴⁾

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University*¹⁾,
*Nishikyushu University Junior College*²⁾, *Nishikyushu University Diversity Center*³⁾,
*Nishikyushu University and Nishikyushu University Junior College*⁴⁾)

(Accepted February 5, 2025)

Abstract

The Nishikyushu University / Junior College Study Group on Support for Developmental Disorders was launched in May 2022 and is now in its third year. Its purpose is to enable experts in research and practice in various fields to share their knowledge and information on the current state and challenges in Saga Prefecture beyond their individual fields of expertise. The experts are from fields such as education, social services, and medical care who are involved in support for developmental disorders at Nishikyushu University or elsewhere.

The study group also aims to enable these experts to discuss approaches for providing effective support to people with developmental disorders in the future while considering possibilities for interdisciplinary collaborations. This is a report on the group's regular meetings from its launch up to November 2024, the outcomes of the "Nishikyushu University / Junior College Study Group on Support for Developmental Disorders Forum in August 2024 (Topic: Support According to the Developmental Stages of People with Developmental Disorders)," and the direction of support for developmental disorders in the future.

Key word : Developmental Disorders 発達障害,
Support for Developmental Disorders 発達障害支援,
Collaborations 連携

1. 勉強会発足の経緯

令和3年に障害者差別解消法が改正され、令和6年4月1日、事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化された。また、発達障害のある子どもの教育や支援に関連して、SDGsや共生社会、インクルーシブ教育システムや合理的配慮など、様々なキーワードの元、教育や福祉、医療や行政等をはじめ様々な分野においても、種々の支援や配慮、施策等が整ってきている。また、2018年には、文部科学省と厚生労働省の両省による「家庭と教育と福祉の連携『トライアングル』プロジェクト」報告が出された。これは支援が必要な子どもやその保護者が、乳幼児期から学齢期、社会参加に至るまで、地域で切れ目なく支援が受けられるよう、家庭と教育と福祉のより一層の連携を推進するための対応策を示したものである。このように、子どもにとっての「連続性のある多様な学びの場・支援の場」（文部科学省、2012）は、就学期だけでなく生涯にわたる地域社会の多くのかかわりの中で用意されるようになってきた。しかしながら一方で、地域の発達障害支援については、保護者をはじめ子どもに直接かわったり支援したりする人たちから、「実際にまずどこに相談に行ったらいいのか迷う」「我が子が発達障害の診断を受けたが、子どもが大人になった時の就労や地域社会への参加が不安だ」など、まだ課題解決にまで至っていないといった声も散見される。

西九州大学・西九州大学短期大学部は、「健康と福祉の探求」を教育目標として、健康・医療・福祉・教育・心理・スポーツ等に専門領域を拡大してきた。そのような中、発達障害支援についてもこれまで文部科学省の補助を受け、平成24年度から大学間連携共同教育推進事業として「大学間発達障害支援ネットワークの構築と幼保専門職業人の養成」、平成29年からは私立大学研究ブランディング事業「発達障害児の二次障害予防の支援研究」にて発達障害をテーマに支援者の養成、地域への支援に努めてきた。また、発達障害支援を主たる研究テーマとする教員も徐々に増えてきている。

そこで、令和4年5月に、本学の各専門領域の教員を含め、佐賀県内の教育や福祉、医療や行政等をはじめ様々な分野の専門家が集まり交流する「西九州大学・短期大学部 発達障害支援勉強会」（以下、勉強会）を発足した。その目的は、各分野の研究・実践の専門家が、発達障害支援に関する知見と共に

佐賀県における現状や課題について各々の分野を超えて共有すること、及びそれぞれの連携についても視野に入れながら、発達障害のある人たちへの今後の実効性のある支援について考えることである。

令和4年度は、5月から月に1回程度の勉強会を定例として開催し、令和5年度以降は定例会を2カ月に1回程度として開催している。また、令和5年度からは、本勉強会の拡大版として広く一般にも参加を呼びかけて「西九州大・西九州大学短期大学部 発達障害支援フォーラム」（以下、フォーラム）を開催している。本報告は、前報告書（令和4年～令和5年10月の実績）に引き続き、令和5年12月から令和6年11月までの勉強会及びフォーラムについての実績報告及び今後の本学の発達障害支援の方向性について述べたものである。

2. 勉強会の概要

発達障害支援勉強会は、令和4年5月に発足以来、西九州大学・短期大学部の教員及び事務局が主体となって開催している。勉強会の参加登録者は、佐賀県内の発達障害支援に関する多様な機関に所属し、実際にその立場で専門的に携わっている社会人である。新規の登録条件としては、既登録者からの紹介のみであり、広報や募集等は行っていない。

令和6年10月現在の登録者は66名であり、その所属内訳は、教育31名、福祉19名、行政10名、医療4名、その他2名である。

1) 開催概要

開催日程は、2か月に1回程度であり、金曜日の18時半から20時の1時間半とした。場所は、西九州大学佐賀キャンパスのALS教室で実施した。ALS教室はActive Learningを目的とした教室であり、机や椅子を自由に移動して配置できることから、参加者の意見交流を行う勉強会に適した会場である。

内容については、話題提供者による講話を30分、その後、話題提供者が設定したテーマについての意見交換が行われた。意見交換に際しては、各自が付箋紙にメモを記入し、そのメモをもとに小グループによる意見交換（グループワーク）が20分、全体への発表・意見交流が30分であった。その後、話題提供者からの感想等を共有し、アンケート記入後に終了している。

2) スケジュール

令和5年度は「発達障害支援の今とこれから」をテーマとして勉強会を開催した。4月～10月については前回の報告書でも述べているが、ここでは改めて年間を通しての内容・スケジュールをTable 1に示す。フォーラムを除く年間5回の開催において、参加者は延べ138名（平均22.8名）であった。

令和6年度の勉強会テーマは「発達障害のある人の育ちのステージに応じた支援とは」である。発達障害のある人はその成長過程において様々な課題や

Table 1 令和5年度開催日及び内容・話題提供者

テーマ：発達障害支援の今とこれから		
回	開催日	内容・話題提供者
1	2023. 6. 9	昨年度の振り返りと今年度の勉強会について参加者による意見交換
2	2023. 6. 30	発達障がい理解と対応 ケトルモレイン中学校情緒行動障がい 専任教師 池田 実 氏
3	2023. 9. 2	「発達障害支援フォーラム」として開催 講演 竹田 契一 氏
4	2023. 10. 13	中高生の学校外における自立支援の場の可能性 ～「ユニスクさが」での実践から～ 放課後スクール「ユニスクさが」 教室長 山田 美穂子 氏
5	2023. 12. 8	限局性学習症に対して医療機関でできること 整肢学園子ども発達医療センター 医師 木附 京子 氏
6	2024. 2. 9	臨床美術（クリニカルアート）を発達障害支援に生かす 西九州大学短期大学部 教授 牛丸 和人 氏

Table 2 令和6年度開催日及び内容・話題提供者

テーマ：発達障害のある人の育ちのステージに応じた支援とは		
回	開催日	内容・話題提供者
1	2024. 5. 17	昨年度の振り返りと今年度の勉強会について参加者による意見交換
2	2024. 7. 12	未就学児の支援について 「幼児教育・保育の現場から」 西九州大学附属三光幼稚園・三光保育園 三光保育園園長 福元 芳子 氏
3	2024. 9. 1	「発達障害支援フォーラム」として開催 講演 竹田 契一 氏 （「3. 発達障害支援フォーラム」参照）
4	2024. 11. 8	学生の支援について 「発達障害の診断を受けていた学生の指導を通して学んだこと」 西九州大学子ども学部子ども学科 准教授 久野 隆裕 氏

困難に直面することが多い。そこで、乳幼児期、学齢期、青年期、成人期といった各ライフステージにおけるそれぞれの発達段階に応じた課題について共通理解を図り、有効な支援策についての知見を共有することを目的として設定した。

令和6年5～11月の開催内容・スケジュールをTable 2に示す。フォーラムを除く3回の参加者は延べ68名（平均23名）であった（勉強会の様子 Fig. 1～2）。



Fig. 1 グループワークの様子



Fig. 2 全体の様子

3. 発達障害支援フォーラム ー事後アンケートからー

令和6（2024）年9月1日、メートプラザ佐賀（佐賀勤労者総合福祉センター）にて「2024年度 西九州大学・西九州大学短期大学部 発達障害支援フォーラム ～発達障害のある人の育ちのステージに応じた支援とは～」を開催した。

テーマならびに講師・登壇者はTable 3の通りである（フォーラムの様子 Fig. 3～5）。

フォーラムの参加者は総勢269名（内訳：事前申し込み271名、当日不参加33名、当日参加13名、関

Table 3 テーマと講師・登壇者

①講演		
<テーマ>		
「発達障害のある人の育ちの各ステージに必要なこと ～乳幼児期から思春期（就労）まで～」		
<講師>		
大阪医科薬科大学 LD センター顧問、 大阪教育大学名誉教授		
	竹田 契一	氏
②竹田先生を囲んで		
<登壇者>		
講演者		
	竹田 契一	氏
西九州大学・西九州大学短期大学部 学長		
	福元 裕二	氏
西九州大学 特任教授		
	日野久美子	氏
<コーディネーター>		
西九州大学 副学長		
	上野 景三	氏



Fig. 3 会場全体の様子



Fig. 4 講師（竹田契一氏）

係者18名)。台風による悪天候の影響により前日まで開催そのものが危ぶまれたが、講師の来佐も可能となり、昨年（239名）を超える参加者で、無事に盛会裏に終えることができた。以下にフォーラムの話題ならびに事後アンケートの結果を報告する（フォーラムの様子 Fig 3～5）。

【講演】

竹田契一氏による講演では、まず、「発達障害」

という言葉は診断名ではないこと、特に自閉スペクトラム症（ASD）や注意欠如多動症（ADHD）と共に発達障害としてくられる「学習障害」という言葉は、教育用語として語られているという大きな流れを述べられた後、育ちの各ステージへの内容へと進んだ。

1) 乳幼児期

自閉症に特化した子どもの様子を例に、0歳児からの育ちの中で、例えば目の合わせ方・抱かれ方・話し方等、ビデオによる映像でも確認しながら具体的な様子が紹介された。これらの背景としての感覚の障害について、聴覚や触覚・光の感受性などに鋭敏さや鈍感さ・歪みがあること、それが幼稚園や保育所などの集団で大きな問題となることを説明された。

また、「支援者は子どもの育ちの何を手伝うか」について、乳幼児期に限らずどのステージにおいても、「子どもの強み・弱みをまずよく知ること。そして子どもの持っている力の中でより良く生きていくために、子どもにちょうどいい・子どもがこうなりたいと思う目標に向かって、そこに近づいていくような支援が求められる。」と述べられた。

2) 学童期・思春期

まず、特別支援教育の現状と課題について、「専門的な知識を持つ教員の不足が深刻であること」、「将来その子どもにどういう大人になってほしいのか」という視点が欠けており、将来ヴィジョンを持った教育の必要性を述べられた。

これに続いて、幼児期から学童期・思春期にとって大切な支援とは「セルフアドボカシー（自己権利擁護）を身につけること」を目標としなければならないと強調された。本人による「自分の得意・不得意などの自己理解」と共に、それに応じた合理的配慮を受けるにしても、それが自分にとってどのようなメリットがあるのかを理解した上で、相手に提案できる人に育てること、つまり「（援助者に頼らずに）自ら権利の主張をしていくことができるようになること」を目指す。「今」も大切だが、どのような成人期を迎えるのかを常に考えた教育的支援が必要で、そのためには一人一人の将来ヴィジョン（学童期・思春期・青年期）を具体的に描くことが大切である。

学童期に特に課題となる学習の問題に関しては、読み書き障害（ディスレクシア）を取り上げ、「子どもが今、どこでつまづいているのか」をはっきり

させるための発達検査や読み書きの検査などによるアセスメントの重要性と、それに基づく根拠のある指導・支援が必要であることが述べられた。

また、保護者とのかかわり方については、「教師は特定の個人ではなくクラス全体の教育を考え、保護者は自分の子どもを理解してほしいと思っている」ことから「想いのズレ」が生じることや、教師が保護者と話をするときには、電話を使わず学校に来てもらって「笑顔でしっかり相手の顔を見て話をすること」が大切であることを語られた。そして「親が子ども自身のことやその周りへの対応で疲れて自信を無くし言われたことも上の空であったりうつになったりする状況かもしれないことへの理解」など、教師と保護者間だけでなく、家族内や父親・母親間でも大事にしてほしいことを述べられた。

このほか、このステージにおける ADHD や ASD のある子どもに見られる状態像やその背景について、様々なエピソードや参加者による簡単な体験演習なども含めて分かりやすく述べられた。

3) 就労・自立に向けて

高等学校以降のステージに関して「就労は学歴ではない。」「『今、あなたは何かができるか』が大切で、単に学歴を積み重ねていけば就労につながるというのは大きな間違いである。」と明言された。これに続いて、いじめや不登校によって自信を無くしている子どもたちが通う「学校法人 大阪 YMCA」での就労に向けた支援の様子を紹介された。ここでは学年によって目標を変えながら人との関わり方やコミュニケーションやソーシャルスキルのトレーニングなどを通して、「自分のことは自分が一番よく知っている」「自分で考え決断し、相手に伝えて認めてもらう」ことを獲得し、子どもが自信を回復し進路を自己決定していく様子が伝えられた。

【竹田先生を囲んで】

フォーラムへの参加申込時に、「竹田先生へ聞きたいこと」について事前に受け付けていた。「乳幼児期の支援について、特に親の受容や行政の支援などのほか、幼児期にすべき支援・やってはいけない支援など具体的なアドバイスがほしい。」また、「教育現場における、インクルーシブ教育や合理的配慮、ユニバーサルデザイン教育といったことなど、現在の動向とそれに伴う教師の専門性との関連について知りたい。」さらに、「思春期や就労に関する支援や移行支援についての現状や課題はどのようなことか。」「学校以外での居場所づくりや発達障害のある

子供をもつ家庭・夫婦間でのパートナーシップに大切なことはどのようなことか」などが寄せられた。竹田氏の講演の中で、すでにこれらの答えとなる話も多く見られたが、これらも踏まえて次の「竹田先生を囲んで」に臨むこととなった。



Fig. 5 「竹田先生を囲んで」の様子

竹田氏の講演を受ける形で、竹田契一氏のほか福元裕二氏・日野久美子氏の2名が加わり、上野景三コーディネーターの進行で会が進められた。

まず、上野氏より「竹田先生を囲んで」の趣旨として、竹田先生の講演を受け、「佐賀県において、私たちがなすべきことは何か」、「大学としての役割、求められることは何か」、ということについて意見交換を行うことが説明された。

竹田氏の講演についての感想として福元・日野の両氏から、幼児・乳幼児期の感覚の問題や児童期・思春期の読み書きを初めとする学習の問題などの話からは、支援者の子どもの観察やアセスメントの重要性を再確認したこと、また各ステージを通して「セルフアドボカシー」を育てていくことの意味と支援のあり方について特に印象に残ったことが述べられた。竹田氏からは、セルフアドボカシーを育むためには、例えば幼児期から自分の衣服を自分で選択するような機会を作ることや、まず大人がモデルとしてやってみせること、一貫性を持って子どもにいてねいに関わり子どもに信用される親や教師になることが大切であることが付け加えられた。

佐賀県の課題として、「合理的配慮について、その合意形成のプロセスや内容について」「児童発達支援事業所（以下、児発）や放課後等デイサービス（以下、放デイ）などの施設を利用する子どもが増える中での、園や学校内外の連携のあり方について」の2点が挙げられた。これに対して竹田氏はまず、『合理的配慮』とは本来リーズナブルアコモデー

ション、つまりその子どもにとってちょうどいい配慮のことである。この子どもに必要なことは何か、他の子どもに比べて不利にならないためにはどうしたらよいかということを念頭に置くことがポイントである」と指摘された。また、連携の課題については、まず児発や放デイなども含めた支援者の専門性及び子どもに対するプログラムレベルアップが求められており、行政によるチェックも必要ではないか。それを前提として、これらの施設と園や学校との間で、それぞれが具体的にやっていることについて情報交換をしっかりと行うことが今後さらに大切である。

大学の役割については、まず福元氏より西九州大学・短期大学部が健康、医療、福祉、教育・保育の分野における人材養成や教育研究を柱としてきた中で、発達障害支援についても『子ども発達支援士』の養成や『発達障害支援勉強会』の開催、『ダイバーシティセンター』の開設、そして本フォーラムについても2年連続で竹田氏を講師に招き開催していることなど、取り組みについて紹介があった。その上で、今後さらに多様な学生を多く受け入れよりよい高等教育をおこなっていくために必要な視点について話題となった。これに対して竹田氏からは、ハワイ大学のKOKUA（コクア）プログラムという、障害学生支援プログラム（例えば、学生が学ぶことが困難な科目の代替として職業訓練を行うなど）を例に挙げ、大学だからこそ可能な多様な取り組みの工夫や、学生のレベルや特性に応じて大学が何を提供できるかを考えることについて示唆された。「大学在学中の合理的配慮を元にして、卒業後もそれを活かしながら地に足のついた社会人として生きていくことが可能となる。」と述べられた。

【事後アンケート】

来場者251名のうち220名から回答を得られた（回収率87.6%）。回答者の所属と年代の内訳をTable 6に示す。

最も回答の多かったのは教育関係者で66名（30%）、次いで福祉関係者が38名（17.2%）と続いている。昨年度は、教育関係者に次いで多かったのは、保育関係者であった。

講演に対する満足度は「満足」186名（84.5%）「やや満足」24名（11%）、合計が95.5%となった。

自由記述には、「事例を元に話していただき、大変分かりやすかった。」「自分から助けを求める子どもに育てるにはどうしたらよいか考えさせられ

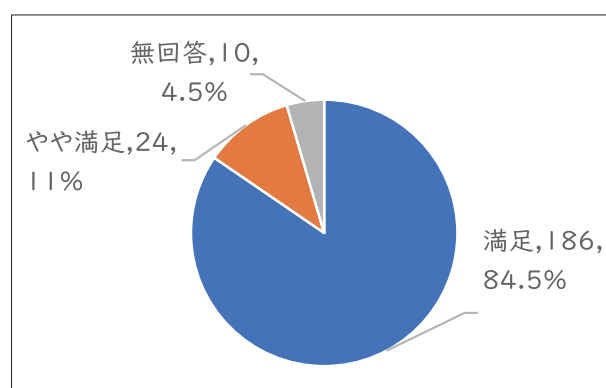


Fig. 6 講演に対する満足度

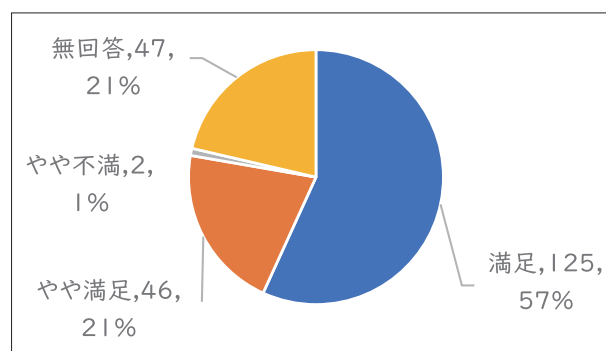


Fig. 7 「竹田先生を囲んで」に対する満足度

た。」といった意見が最も多かった。(Fig. 6)

また、「竹田先生を囲んで」についても満足度は相当高く、「信頼関係や繰り返し伝えることの大切さがわかった。」「合理的配慮を学ぶことができた。支援する側のレベルアップも大切。」と意見があった。一方で、「やや満足」が21%とあるが、その理由として「時間が足りず話をもっと聞きたかった」という意見が多かった。(Fig. 7)。

ここからは職種別に、講演並びに「竹田先生を囲んで」に対する満足度と自由記述、及びフォーラム全体に対する感想（自由記述）を内容ごとに分類した。

1) 教育関係者（回答数66件）

教育関係者は回答者が多かった為、回答の傾向を検討する為にも職種と年代の内訳をTable 7に示す。

① 講演の満足度と感想・意見

講演の満足度は、満足と回答したのが58名（87.9%）、やや満足が8名（12.1%）だった。なお、「やや満足」と回答している理由として「もう少し聞きたかったという意味で“やや満足”とした」という意見が多く、全体として満足度はほぼ100%だったことが分かる。

感想・意見は、「セルフアドボカシーを育てることの大切さがわかった・人の得意不得意を互いに認

Table 6 アンケート回答者の所属と年代（人）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無記入	総計
教育		1	4	15	35	11			66
福祉		4	3	6	12	10	2	1	38
保育		5	2	13	5	5	3	1	34
行政		1	3	8	6	3			21
保護者			1	5	6	6	2		20
その他					2	3	8		13
高等教育			1	6	1	2	1	1	12
医療				3	3	1	1		8
学生	2	2		1					5
無記入		1	1			1			3
総計	2	14	15	57	70	42	17	3	220

Table 7 教育関係者の内訳（人）

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答	総計
小学校教諭	1	1	4	17	6			29
中学校教諭		1	3	7	2			13
高等学校教諭		1	2	1				4
特別支援学校教諭			4	4				8
小学校養護教諭				1				1
SC・相談員			2	1	3			6
支援員		1		4				5
総計	1	4	15	35	11	0	0	66

め、特性の理解を深める必要性がわかった」が25件、「自身の指導の気づきになった、今後活かしていきたい」が15件、「具体的な事例を踏まえており大変有意義であった。」12件となった。このように、内容は3つに大別されたが、その多くは単独で表現されており、また、「発達障害のある子どものつまずきの原因などポイントが具体的にわかった。「必要な支援を自分から発信することができる児童・生徒」を育成する為に、明日からの業務に取り組んでいきたい。」という内容だった。この中には「昨年に引き続きすばらしかった」と連続参加をうかがわせる内容が5件あった。今後のフォーラムへの期待と受け取ることができ、何よりも竹田氏の講演内容と説得力をうかがわせるものであった。

② 「竹田先生を囲んで」の満足度と感想・意見

「竹田先生を囲んで」の満足度に関して、満足は38名（57.6%）、やや満足は11名（16.7%）、やや不満2名（3%）、無回答15名（22.7%）となった。

感想・意見として最も多かったのが「具体的な事

例や配慮、支援の方法に関しての理解が深まった」20件、「時間の都合ですべて聞けずに残念、時間調整をしてほしい」といった意見が6件、「竹田先生のコメントをもっと聞きたかった」が4件だった。内容別には「合理的配慮についてその子にとってちょうどよい解決方法を見つけることが大事だと理解できた」10件、「竹田先生の多彩な経験に触れられて、非常に感謝している」9件、「放デイと学校との連携方法についてもっと深く知りたい」8件だった。

西九州大学の取り組みについて満足感が高く、レベルの高い「竹田先生を囲んで」であるという意見も散見された。一方で時間配分など進行に関する課題は残った。中には「参加者の事前質問があるのなら、その質疑応答があってもよかった」といった意見もあった。

③ フォーラム全体に対する感想・意見

回答を内容ごとに分類した。前向きな意見として、「自身の業務の振り返り」が11件、「企画・運営へ

Table 8 福祉関係者の内訳（人）

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答	総計
支援員	2	1	2	3	3			11
保育士	1	2		3				6
児童指導員	1			3				4
心理士			2	1	1	1		5
管理者				1	3			4
民生委員					1	1		2
その他			1	1	1			3
無回答			1		1		1	3
総計	4	3	6	12	10	2	1	38

の謝辞」が11件、「竹田先生の講演がよかった」が10件、「次の開催への期待」が6件、「西九州大学の取り組みについて理解できた」が4件だった。一方で、フォーラム全体の時間配分やスケジューリング等の運営に関する指摘が3件あった。

2) 福祉関係者（回答数38名）

福祉関係者の回答は38件で、職種と年代の内訳をTable 8に示す。

① 講演の満足度と感想・意見

講演の満足度は、満足が32名（84.2%）、やや満足が5名（13.2%）、無回答が1名（2.6%）だった。

感想・意見について内容をまとめると、「知見を得ることができた」「勉強になった」が16件、「今後の福祉に活かしたい」7件、「もう少し聞きたい」「次回開催への期待」が8件、話題の中核であった「セルフアドボカシー」に関する興味・関心を示した意見が5件、「もっと福祉に活かせる話をしてほしい」が1件となった。

② 「竹田先生を囲んで」の満足度と感想・意見

「竹田先生を囲んで」の満足度は、満足が26名（68.4%）やや満足が7名（18.4%）、無回答5名（13.2%）となった。

感想・意見をまとめると、「勉強になった、理解が深まった」が24件あった。詳細について述べると「関係機関と学校と家庭との連携」「合理的配慮とは何か」「発達障害の正しい理解」「保護者との関係性」「幼児から就労までの支援」について学んだという意見があった。また今回の内容がステージごとの話題であったが、それを受けて「発達障害支援について、各ステージに必要な話が聞け、これからの方向性が見えたようだ」という意見が4件あった。また、要望として、「子ども、大人の発達障害の違いや対応の仕方を聞きたい」「もっと対処法を聞き

たかった」といった意見が6件あった。さらに特に知りたい内容として、就労に関すること（2件）が挙げられていた。

④ フォーラム全体に対する感想・意見

フォーラム全体に対して、「有意義だった」（8件）、次年度開催を期待する声が挙がっていた（7件）。要望として、「教育・福祉・医療と連携を考えるフォーラムにしていきたい」「内容を絞って、具体的なことを知りたい」「先生たちにも親にももっと竹田先生の話聞いてほしい」といった意見があった。運営に対しては、時間配分を課題とする（2件）一方、企画運営への労いの声も散見された。

3) 保育関係者（回答数34件）

① 講演の満足度と感想・意見

講演の満足度は満足が30名（88.2%）、やや満足3名（8.8%）、無回答1名（2.9%）となった。

感想・意見には、「新たな知見を得た」という意見が17件あった。講演を受けて「各段階の特性がわかった」（7件）、「自身の振り返りになった」（4件）、「セルフアドボカシーの大切さを知った」（4件）、「発達の流れについて興味深かった」（2件）といった意見があった。この中に「幼児期だけでなくその先まで、視野を広げ、自己理解を深められる子どもに育っていけるよう支援したい。」（4件）といった意見もあった。

② 「竹田先生を囲んで」の満足度と感想・意見

「竹田先生を囲んで」の満足度について、満足は23件（67.6%）、やや満足は8件（23.5%）、無回答が3件（8.8%）となった。

感想・意見には、「子ども自身が決めることの大事さがわかった」10件、次いで「具体的なお話を聞けて良かった」「もっと話を聞きたかった」がそれぞれ4件となった。この他に「アセスメントの重要

性を改めて理解した」「世界の教育事情を知ることができた」「業務改善に役立つ」といった意見があった。

③ フォーラム全体に対する感想・意見

フォーラムについて、多くは「次年度開催に向けた期待」「今後の発達障害支援での連携の重要性」について感想が述べられていた。

4) その他(行政、保護者、高等学校、医療、学生) (回答数66件)

行政関係者からは、「子どもの発達特性の理解」「行政・教育・家庭との連携」「ステージに応じた支援」に関する話題から「新しい知見を得た」という意見が最も多かった。

保護者は、「SOSを出せる子の大切さ」「これから大人と成る学びを教えてもらえた」「理解(知る)することの重要性」という今後の子育てに繋がる記述が多かった。

高等教育機関関係者は、「セルフアドボカシーを学ぶことで、今後活路を見出せた」「合理的配慮は、それまでの成長過程も重要」「個の環境への理解が合意形成とつながる」と記述していた。

4. 勉強会の参加者の声

1) 令和5年度を通して

令和5年度末に、参加者に対して当年度の本勉強会に関するアンケートを行った。質問は「①所属(専門領域)」「②勉強会は求めているものと合致していましたか」「③勉強会の内容・テーマについて(各回別)」「④勉強会の開催日程・時間について」「⑤勉強会の運営・進行について」「⑥勉強会の内容について、自分の仕事に生かせることができましたか」「⑦⑥のあった場合の具体的内容」「⑧勉強会で特に参考になったテーマ・印象的な話があれば教えてください。」「⑨次年度の内容について」「⑩自由記述」の9項目である。②から⑥については「満足ーやや満足ーやや不満ー不満」の4件法による回答で、⑦から⑩については自由記述による回答を求めた。

令和5年度末の勉強会登録者55名に回答を求めたところ、31名から回答を得た(回答率56%)。質問①～⑤についての回答をFig. 8～Fig. 13に示した。

合わせて、⑦から⑩の自由記述の内容について、以下のようなことが述べられていた(一部抜粋)。
・⑥⑦「自分の仕事に生かせること」の具体的内容

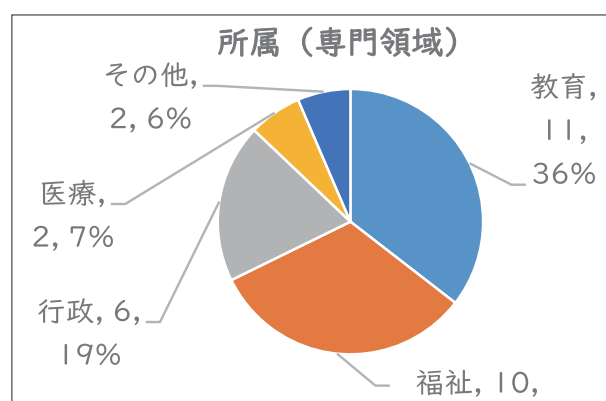


Fig. 8 回答者の所属

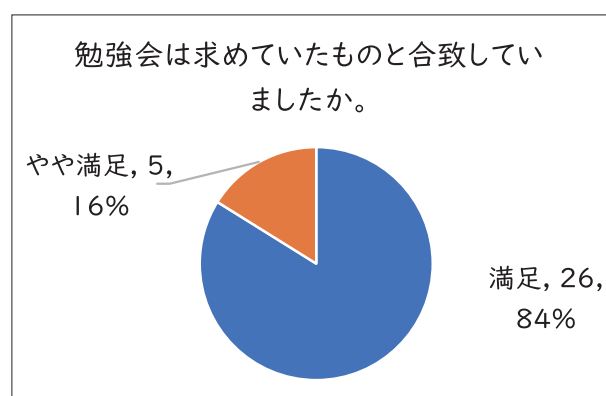


Fig. 9 勉強会は求めているものと合致していたか

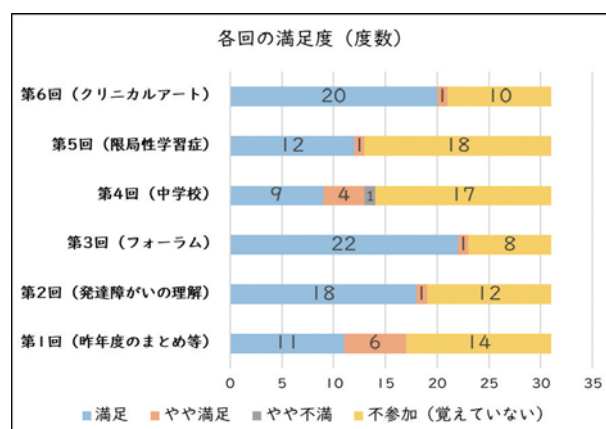


Fig. 10 勉強会の内容・テーマについて (度数)

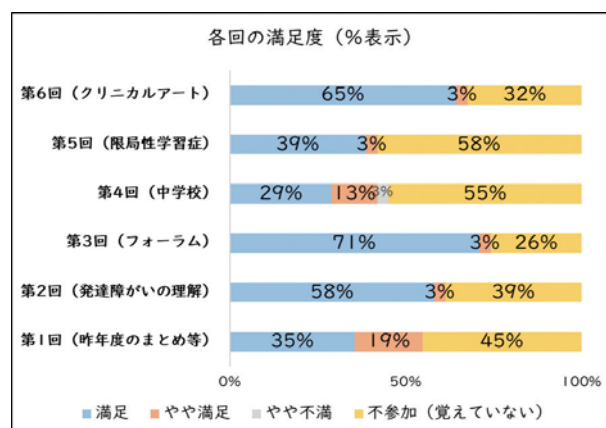


Fig. 11 勉強会の内容・テーマについて (割合)

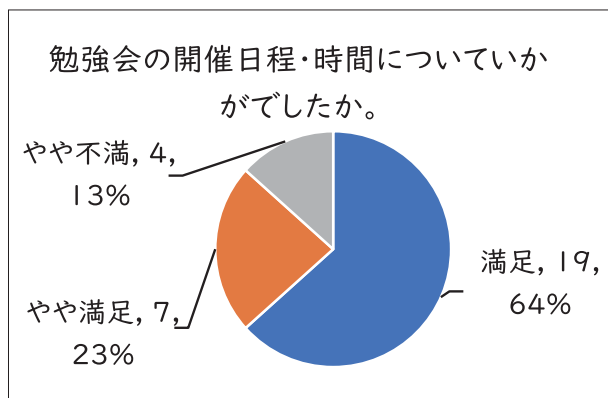


Fig. 12 勉強会の開催日程・時間について

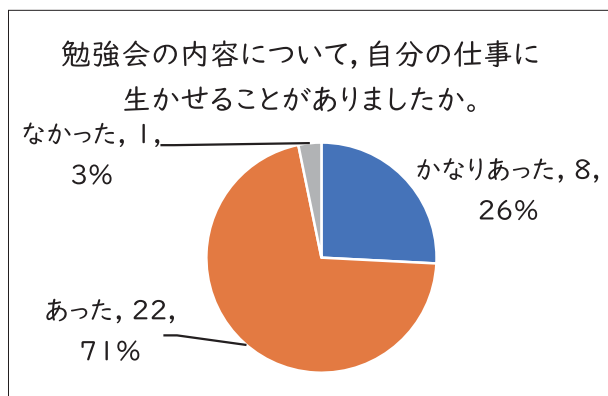


Fig. 13 自分の仕事に生かせること

<支援者としての向上>

「子どもたちの困り感の原因は何か、発達支援が必要なのか、どう関わるのが子どもたちにとってベストであるのか、子どもたちを見る視点が広がった。」「支援者としての子どもの見取り方、手立てを考える上での視点などを学べた。」「新たな視点や知識が増えたことで、子どもの理解がより深まった。」

「具体的内容というのは特にはないが、さまざまな専門職の方のお話を聞くことができ、視野を広げることができたと思うし、多職種で関わることの重要性を実感している。」等の記述から、参加者自身が支援者としての向上を実感していることがうかがえる。

<参加者の所属分野に応じて役に立つ>

また、「相談対応時、本人の状況の聞き取り方や支援のアドバイスに役立った。」「日々の授業の参考になっている。」「LD児について竹田先生の講義や木附先生の話があり、今後も学校現場で出会うLD傾向の子どもへの支援について大変役立つと思う。」「職員で発達支援について話す場に、活かせることがあった。」「2023. 11月に佐賀県で開催された全日本パラ水泳選手権大会の際、知的障害選手への応対において勉強会内容が参考になった。」など、

参加者の各仕事・分野に応じて役に立つ内容であったことが分かった。

<連携の重要性の再認識>

さらに、「職場以外の方と話せる機会であること。色々な情報を得る機会になっている。」「福祉や医療などの関係機関の方々の視点を学ぶことができとてもありがたかった。学校現場のことも伝える場面もあり、情報共有できたことは非常によかった。」「グループワークで様々な分野の人の考え方や立場を共有することができた事が大きな収穫であった。」「行政職であり、現場に対しては間接的な関りである、かつ福祉分野に携わることが初めての私からすると、現場にて直接支援されている方々のお話を伺う機会は非常に勉強になる。」「自分の働く部署での子ども理解は事案ごとに深まるが、その後のこどもの育ちについて各分野の先生方のお話を聞くことにより、トータルライフで考えることができるようになった。」など、話題提供者から提示されたテーマについて、グループ内の様々な分野の参加者と意見交換することで、自分が所属する以外の専門職との連携及びその重要性の認識が深まっていることが分かった。

・⑧勉強会で特に参考になったテーマ・印象的な話

各回の内容については「第2回の池田先生のアメリカのお話はとても印象に残った。参考になった。」「デイサービスでの子供たちの日常。」「『学習障害』について自分が全く理解していなかったことを認識した。あわせて、理解が進んでいると思っていた教育現場でも十分ではない現状に衝撃を受けた。」「第6回の臨床美術の研修は初めての体験で、とても貴重な時間を過ごすことができた。今回のようなワークを中心にした研修では、自分の考え方のクセなども見つけることができたと思った。」「(第6回にて)日頃、自分がいかに「評価」する・されることに意識を強く持って過ごしているか気づかされた。」など、特に日頃接することの少ない話題や演習などを通して学びが多かったことがうかがえる。

フォーラムに関する内容として「(フォーラムでの)竹田先生の発達障害の最新事情は、マルトリートメントやギフテッドの話題などとても興味深い内容であった。」「発達障害支援フォーラムの先生方のお話は、どれも参考になった。」「中尾先生の学校における困り感のある生徒への支援。この取組が佐賀県全体に広まると良いと思った。」「『竹田先生を囲んで』での各所からの発達障害児、発達障害者支援

のお話は初めて聞くところも多く、大変勉強になった。竹田先生のお話を聞いて、子どもたちの困り感をしっかり理解して受け止め、支援につながる関わり方をしていかなければならないと思った。」など、勉強会参加者からも、大変有意義であったことが述べられていた。

・⑨次年度の内容について

次年度の内容についての要望等として、「WISC-IVの結果を支援にどう活かすかについて、事例をもとに」「愛着障害について」「保護者支援について」「自閉スペクトラム症の療育について」「幼稚園や保育園の場での支援、ペアレントトレーニング、ABAなど、小さい子どもたちへの支援について話」「未就学児の具体的な発達支援、保育、幼稚園などの現場でできる具体的な支援方法。療育との連携についての話」「児童福祉法改正に伴い、児童発達支援センターの地域の療育の中核的役割が求められる中、どのような発達支援が必要であるのか。福祉と教育の連携についての先進事例等。」など、多様な分野からの意見が出された。

また、グループワークについても「多職種の皆さんとのグループワークがたくさんあるとうれしい。中高生や大人の発達障害の方への具体的な対応をされているケースなどが学べたらうれしい。」「グループワークの時間を増やしていただけると他職種の方と話す機会となり、ネットワークの構築になったり、いろいろな情報を得られたりするのではと思う。」など、その充実を望む声が寄せられた。

さらに、「今年度同様にいろいろなパターンがあるといいと思う。インシデントやワークショップや講演会の参加等、とても良かった。」「今年度のように様々な角度からのテーマ研修ができればありがたい。」「広い視野・視点で私達が発達障害について学べると助かる。」「今年度のように、様々な視点からの話題提供は、ワクワク感や新たな発見があり、とても楽しかった。」など、多職種の専門家の集まりを意識した内容の設定の要望が多かった。

・⑩自由記述

「各分野、現場の実情を知ることが子ども理解に繋がっている」「勉強会のおかげでいろいろな方と接点ができ、話をする機会もあり、「つながり」を感じている。今後も発達障害支援の勉強会で今以上に自己研鑽できたらと思っている。」「直接勉強会と関連するかわからないが、教員、福祉職の人材確保が年々難しくなっているように感じる。支援者の質

の底上げを図ることで魅力的な仕事であることをこれから目指す学生などに伝わるのではと考える。」などの記述が見られた。このほかに、開催時期や曜日、時間に関する要望などが寄せられた。

2)令和6年度第1回～第4回まで(第3回はフォーラムとして開催のため除く)

令和5年度のテーマ「発達障害支援の今とこれから」では、今現在の発達障害支援についての情報を正しく広く得て、今後の方向性を考えることを目指して取り組んだ。その結果、各分野における支援者の取り組みの実際を知ることによって各支援者間連携の重要性が再認識された。

これら令和5年度のフォーラムを含む勉強会の実績や参加者の年度末アンケートの結果を受けて、令和6年度のテーマを第1回勉強会の年間計画立案時に、「発達障害のある人の育ちのステージに応じた支援とは」と提案した。その結果、支援の在り方について、前年のテーマが支援者側からの視点(支援者が行っていること)であったのに対して、令和6年度は、一人の子どもの成長段階における支援をイメージしながら考える(子どもにとって必要なこと)という、子どもの側からの視点に立ったテーマとなった。それぞれの子どもの成長の段階(育ちのステージ)には、その時々に応じてどのような支援が必要なのか、各参加者は各々の立場によってどのような支援が求められているのか、また実現できるのかを考えていくこととした。以下に、第2回及び第4回の勉強会参加者の感想を記す。

・参加者の感想(自由記述より)

<第2回「幼児教育・保育の現場から」>

- ・自分だけで問題について考えるとどうしてもミクロな視点で考えてしまう為、問題の捉え方や解決方法などを色々な視点での意見が聞け、視野が広がった。また、福祉(児童発達支援)の立場の方等様々な立場の方がどのような立ち位置で保護者と接していらっしゃるかなどを直接聞くことができ、やはりお互いに子どもを中心とした保護者支援を念頭に、日々同じ心情で仕事をしていることができ、励みになった。今後の仕事に活かしていきたい。
- ・保育所の生の声をきくことができ、勉強になった。行政がこれから取り組んでいかなければいけないことは沢山あると再認識した。いろんな職種の先生方からの声をこれからも参考にさせて頂きたい。

- ・私達の仕事は見直しが必要だったと覚えることができた。いろいろな方とお話することで、「福祉とは…」と言えても、それぞれの立場があるので、考えたり感じたりすることがあるということを知ることができた。もう一度見直して、幼、学校、福祉、行政が一つになることを目指していこうと思う。
 - ・それぞれのセクションが連携したいと思いながらも、独立し、理解が進んでいないということを改めて認識した。子どもの育ちにつながるよう関係機関の継続的な歩み寄りが必要だと思う。お互いの理解の促進につながるような。
 - ・教育、保育園、福祉、色々な立場の方の話で聞くことで、再認識できた。福祉制度、サービスの認知度が低いことを知り、（自分たちの）周知不足だと思った。対面で現場の生の声を聞く機会が参考になることや考えさせられることがあった。
- ＜第4回「発達障害の診断を受けていた学生の指導を通して学んだこと」＞
- ・まさに現在支援をしている中で、立ち足だかつている問題であった。就職に向けて悩んでいる方、自己認知で悩んでいる方等の支援をやっているが、なかなかうまく支援ができていない。色々な方とのお話ができて支援方法、理解をどのようにしていくのかを考えさせられた。明日からの支援に役立てていきたい。
 - ・現在、配慮学生支援に携わる中で、自己理解、自己受容、セルフアドボカシーの大切さは重々承知しているが、様々な立場の方々からの話を伺い、より深く考える機会となった。自認できていない学生への支援を職場で共有し業務に活かしていきたい。
 - ・本日は多職種の方々とのグループ協議を通して、自分にはない（少ない）視点を得ることが出来た。教育の分野では本人の支援中心になってしまいがちだが、相談できる環境づくりや継続的なサポートについては大変勉強になった。自分から助けを求められることができるという支援ができたと思った。
 - ・成人の発達障害の特性のある人に対する支援策を考えるうえでとても参考になる意見があった。
 - ・青年期の当事者の話を聞く中で、今、実際に関わっている子ども達が今後どのようなことにつまずき、誰に相談していくのだろうかと考えた。その子のライフステージと一緒に考えていく支援はやはり

大切な存在であることを再認識することができた。

- ・異業種の職場、現場での視点を知りとても勉強になった。皆、困りのあった人を思い浮かべながら話をしたが、共通点は「まじめ」。周囲が特性を知らないから「受け入れられない」といったところ。そして何かの「せい」にしていることも共通だったので、もっと早く自己理解につなげられる場所（チャンス）は社会の中に沢山必要だなと感じた。

5. 今後の課題と展望

勉強会の目的は、「各分野の研究・実践の専門家が、発達障害支援に関する知見と共に佐賀県における現状や課題について各々の分野を超えて共有すること、及びそれぞれの連携についても視野に入れながら、発達障害のある人たちへの今後の実効性のある支援について考えること」である。

本勉強会は令和6年度で発足3年目を迎え、フォーラムの開催も2年連続で開催することができた。

勉強会参加者の感想やアンケートからも、各分野において実際に支援を行うにあたり、他分野と互いを補ったり連携したりするための、具体的な方策のヒントを得る場となっていることが分かる。

前回の報告書では、本勉強会を主催する西九州大学としての課題について、西九州大学の発達障害支援の方向性を探るための情報収集の場としてとらえ、企画・運営すること、及びここでのつながりを活かし、産官学民等の共同による佐賀県の発達障害支援について検討したり、具体的に発信したりすることが課題として挙げられていた。令和6年度中には、本勉強会参加の行政機関や民間機関と西九州大学との連携協定等も動きつつあるが、これについては今回の報告で行うこととする。

6. 引用文献

- 内閣府（2024）障害を理由とする差別の解消の推進
<https://www.8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html>
- 文部科学省、厚生労働省（2018）家庭と教育と福祉の連携「トライアングル」プロジェクト～障害のある子と家族をもっと元気に～
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubet

u/material/1404500.htm,https://www.mhlw.go.jp
/stf/seisakunitsuite/bunya/0000191192.html

文部科学省（2012）共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要（中央教育審議会初等中等教育分科会平成24年7月23日）.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/hukyo3/044/attach/1321668.htm